一人一人が安心して伝え合える学級を目指して

新潟市立新津第三小学校　中原　柊熙（R2 年度）

【主張】

私が目指す学級の姿は，「**一人一人が安心して伝え合える学級**」である。集団として生きていく上で，「伝える」という行動はなくてはならないものだと考える。授業中でも休み時間でも何気ない時間でも，生活していれば，感受し，思考し，それを伝える場面が必ずでてくる。また，伝え合うことは，互いを認め合い自己肯定感や自己存在感を感じることができる良さがある。授業や日常活動，非日常活動で「伝えたいと思う主体性の育成」と「安心して伝え合える風土の醸成」を継続的に行うことで，「一人一人が安心して伝え合える学級」になると考える。

1　主題設定の理由

一人一人が安心して伝え合える学級にするために大切なことは，「１．伝えたいと思う主体性の育成」と「２．安心して伝え合える風土の醸成」である。これらを大切にすることで，自己肯定感や自己存在感を感じることができ，昨今，社会問題となっている「いじめ」や「不登校」に強い学級になると考える。

1　伝えたいと思う主体性の育成（個へのアプローチ）

自分の思いを伝えることに消極的な子どもが見られる。ゲームやタブレットが普及した今では，画面と向き合うことが増え，直接顔を合わせてコミュニケーションを取る機会が減った。そのためコミュニケーションの取り方が分からないといった子どもが増えてきていると感じる。自分の思いを伝えることは，これからの社会を生きていく上でより一層大切になってくると私は感じる。そこで，伝えることで自己肯定感や自己存在感を実感できるようにし，子ども自ら「伝えたい」と思えるようにすることが大切だと考える。

2　安心して伝え合える風土の醸成（全体へのアプローチ）

前述した伝える主体性をもっていても，学級の風土が否定的であったり無関心であったりすればその主体性はすぐに失われてしまう。私は，安心感をよく温度に例えるが，学級には「温かさ」が必要不可欠であると考える。誰かが伝えたときに周りの子どもの反応が温かければ，そこに安心感が生まれ，また伝えたいと思える良循環が発生する。だから，安心して伝えられる環境づくりが大切だと考える。

2　実践の概要

(1) 実践時期と子どもの実態

①実施時期　令和６年４月～令和６年現在

②対象となる子ども　新潟市立新津第三小学校　３年４組　３０名

③４月の子どもたちの実態

３年生への進級で小学校初めてのクラス替えがあった。知り合いもいるが，多くはあまり関わったことのない子どもの集まりである。そのため，一部の子ども同士でしか交流がなく，友達ができないといった不安感を吐露する子どももいた。初めてのクラス替えや新しい環境に不安を感じる子どもや逆に楽しみにしている子どもなど様々な感情が感じられた。とても元気で活発な子どもが多く，活気がある。反面，自分のことばかり考え，意見が食い違ったり，衝突したりするとすぐに揉める様子も見られた。

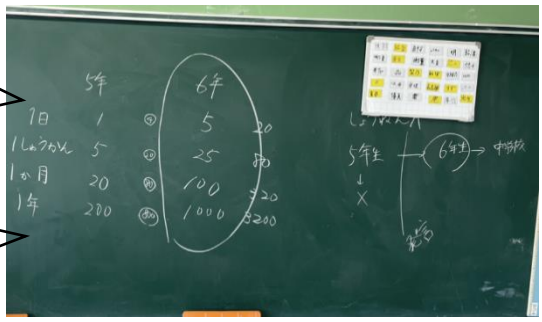
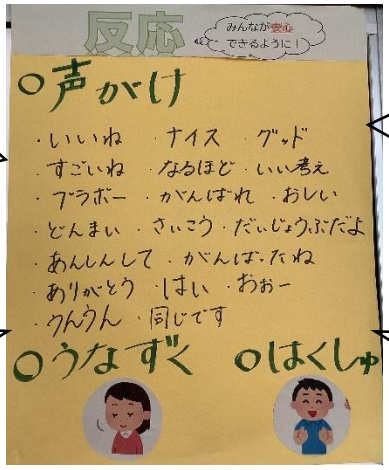
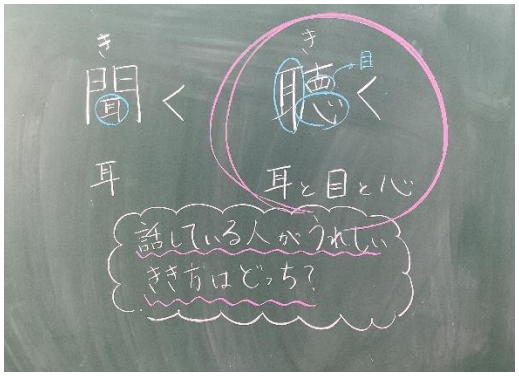
(2) 実践の内容

①授業の実践

授業での伝え合いこそ，自己肯定感や学級での自己存在感を感じることができる格好の場であると考える。その軸は「発言」である。７月には，全員発言が当たり前になり，１日に全員発言が３周することもあった。その結果，学級力アンケート（※詳細は，③に。）の振り返りでも「発言する力がとても上がった。」「３年生になって自分の意見を伝え

られるようになった。」といった自己肯定感の高まりが多く見られた。発言することによって，自分が授業をつくっている１人であるという授業での自己存在感を感じることができる。また，みんなが発言して協力して授業をつくっているという実感から，連帯感や一体感を感じていた。

授業での実践の関係性と詳細については以下の通りである。

実践名	実践内容	実践と子どもの様子
発言にチャレンジ！（発言することへのきっかけをもたせる）	「１日に１回発言すると１年で何回になるのか」など具体的な数字を示し，子どもの発言意欲を高める。	T「１日に発言が０回だと１年間でも０回だよね。でも，１日１回すると１年で何回になるかな？」 C「１日１回すると１年間でこんなにできるんだ！１日１回でもいいから頑張ってみたいな。」 
話している人を安心させよう！（周囲の反応の大切さと方法の確認）	子どもに実演させ，反応がある時とない時でどう感じるかを共有する。反応の必要性を感じた後，反応にはどんな方法があるか子どもたちと一緒に考え，教室に掲示する。	T「自分が話をしている時，どんな風に聞いてくれたらみんなは安心して話ができるかな？」 C「ぼくは，目を見てくれたらうれしいな」  C「私はグッドと最高で反応したら安心できると思います。」 T「では，みんなでやってみよう！」
目と耳と心で聴こう！（話の聴き方の確認）	自分が話をしている時，どのように聞いてもらえたら嬉しいか話し合い，子どもに実演させる。「目と耳と心」で聴くという聴き方の確認をする。	T「きくには，“聞く”と“聴く”という漢字があるんだよ。どんな違いがあると思う？」 C「“聴く”という漢字には，耳と目と心があるよ。いつもの聞くと違うってことかな？」 
みんな勉強する仲間！（教え合うことの大切さを考える）	人に教えることは，１番頭に入る方法であり，人を助けることでありながら，自分の勉強になることを伝える。また，「分からない」が言えることの大切さも伝える。	C「この問題分からない…。どうやってやった？」 C「わたしも自信ないけど，こうやってやったよ。ここはね，こうして…。」 C「そのやり方いっしょだ！よかった～。この方法やりやすいよね。」

特に発言につながる成果を実感したのは，「子ども同士の教え合い」である。教えることが周りだけでなく，自分を高めることを伝えると，数名の子どもがその後すぐに実践した。すぐさま教師がそれを価値づける。教えた子どもと教えられた子どもから感想を聞き，周りの子どもにも教え合うことの価値を伝える。そうして教え合いが定着すると，子どもに変化が見られた。それは，発言数が増えたのだ。子どもに理由を聞くと，「教え合うことでやり方や答えが確認できて安心した。」「同じやり方の人がいるから自信をもって発言できた。」という声が聞こえた。

つまり，子ども同士で教え合うことで

①すぐに問題が解けた子どもは，教えることで自分の考えを確かなものにできる。	②解けたが不安な子どもは，教え合うことで，確認し考えに自信をもてる。	③解けなかった子どもは，教えてもらうことで新たな考えをもち，みんなと同じという安心感をもてる

伝えたいと思う主体性の育成

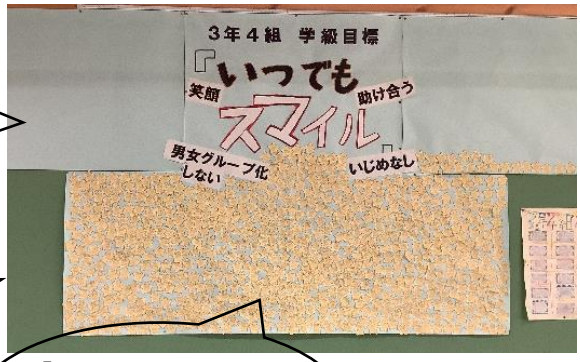
という効果が見られた。

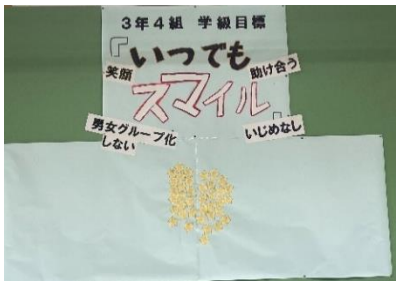
さらに教え合うことと同様に大切にしたことが「分からない」を発信できることである。教える側のみが伝える力をつけるだけでは，伝達方向が一方向である。分からない側も素直に「この問題分からない，誰か教えて」と伝えられることがとても大切である。そのためには，分からないことはいけないことではないことや分からないを伝えられることの素晴らしさを学級で共通理解しておくことが重要である。「分からない」と伝えられた子どもはすぐさま価値づけた。「今，〇〇さんが分からないって友達に伝えたよね。それってとっても勇気のいることだと思うよ。自分の気持ちを素直に伝えて素敵だね。」とみんなの前で価値づけることにより，分からないと伝えられる風土を醸成した。

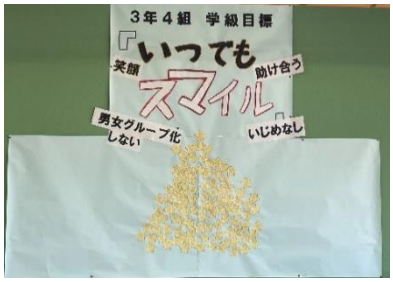
教え合うことは「自分の考えを人に伝える」という行動であり，分からないが言えることは，「自分の気持ちを人に伝えること」である。そして，発言も「自分の考えをみんなに伝える」という行動である。いずれも伝えるという行動が自己肯定感や自己存在感を高めることに繋がった。

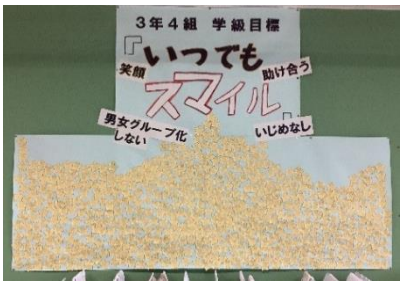
②日常活動の実践

日常活動での伝え合いでは，「自己肯定感を高めること」と「誰とでも仲良くできること」を目指して実践を重ねた。実践の詳細は以下の通りである。

実践名	実践内容	実践と子どもの様子
増やそう！スマイルスター！（学級目標を使った友達のいいところ見つけ）	学級目標の掲示物を活用し，友達のいいところを見つけ，それを書いて掲示していく。掲示していくことで，友達のいいところ，学級のいいところが増えていくことを視覚的に実感することができる。	T 友達のいいところを見つけて，伝えた人がこんなにたくさんいるなんてみんなすごい！  C「最初は恥ずかしかったけど，いいところを伝えてもらえるとうれしい。」 C「みんなのいいところがたくさん集まってきたね。なんかうれしいね。僕ももっと伝えよ！」







日直さんの良いところを伝えよう！（日直のいいところみつけ）	帰りの会で日直のいいところを伝える。日直なので，必ず全員がいいところを伝えてもらえる。	T「みんな日直さんのことをよく見ているんだね。それが伝わってきたよ。」 C「おお！こんなに手が上がるなんて照れるな。」
アクション！（誰とでも仲良くなるための学級活動）	誰とでも仲良くできるようにするための活動。身体接触がある動きを入れ，性別関係なく，誰とでも仲良くできるような条件を整える。	T「今日は腕相撲です。男女２人ずつにしよう。笑顔が大切だよ。よーい，スタート！」 C「先生わたしもう全員とやったよ！」 C「まだやってない人いる？一緒にやろう！」

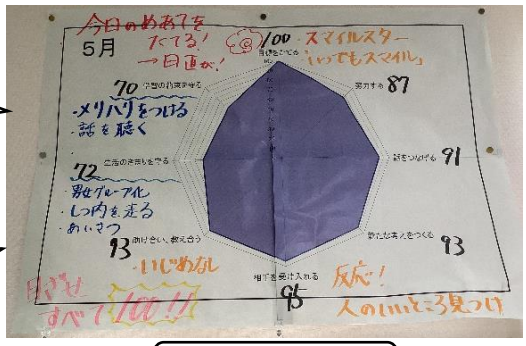
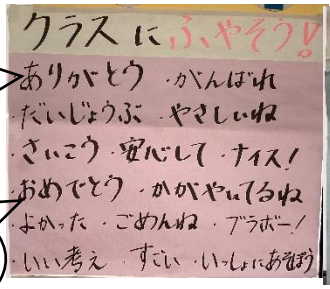
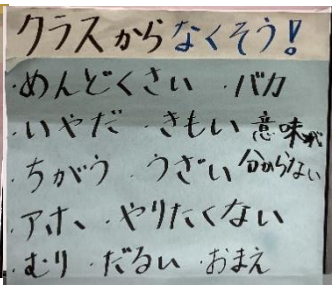
上記で述べた「アクション」は本学級経営の中心になる活動である。子どもたちを見ていると，特定の人としか遊ばない，特定の人としか行動しないいわゆる「グループ化」が存在する。高学年になってくるとより一層激しくなり，そのグループ化が起こると子どもたちは安心して伝え合うことができない。安心して伝え合うためには，性別も関係なく誰とでも仲良くできることが大切であると考える。

そこで最初に行ったことは，グループ化の怖さと誰とでも仲良くできることの重要性を伝えることだ。学級が始まった３日目に行った。子ども数名を前に出しながら役割演技法で子どもと一緒にグループ化の構造や危険性について考えた。その後，１回目のアクションを行い，誰とでも仲良くすることの楽しさを子どもたちに感じさせる。そして教師はすぐに価値づけをした。

このようにアクションを重ねていくと，子どもたちに大きな変化が見られた。これは①で述べた「教え合い」にも大きな影響を与えていた。成果の具体については，**３ 成果**で後述する。

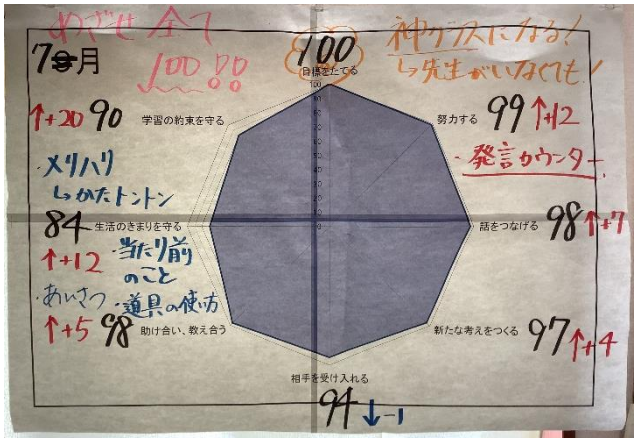
③非日常活動の実践

非日常活動での伝え合いは，日常的にできないことだからこそ，効果のある実践だと感じる。

実践名	実践内容	実践と子どもの様子
みんなでクラスを成長させよう！（学級力アンケート）	２ヶ月に１回学級力アンケートを取り，レーダーチャートとして結果を確認し，子どもと振り返る。	T「これを見て色々なことを感じたよね。それをみんなに伝えてみよう。」 C「やっぱり，友達と教え合ってるから話をつなげるとか，相手を受け入れるとかが高いんだよ。」  ５月
お隣さんにありがとうを伝えよう！（席替え時のお隣さんへのお礼の手紙）	席替えをするたびに隣の人にお礼の手紙を書き，読んで渡す。敬語を禁止し，より親しんで書けるようにする。	T「敬語と話し言葉どっちの方が温かい感じがするかな？」 C「少し恥ずかしいけど，でも嬉しい気持ちになった。」 C「たくさん勉強を教えてくれたからそれも書こう。」
言葉を大切にしよう！（言葉の使い方・選び方の確認）	学級で増やしたい言葉となくしたい言葉を話し合って確認する。また言葉の伝え方などを「声色」として確認した。	T「言葉ってすごく大切なんだよ。クラスの中にどんな言葉が増えると温かい気持ちになるかな？」 C「うわ，おれなくしたい言葉言ってたかも。もっとピンクの言葉増やしたい！」   T「温かい言い方って色にすると何色かな？イメージしてやってみよう！」 T「ピンクとか赤！明るい色が温かそう！ピンク色で言ってみよう。」

非日常活動で行った「学級力アンケート」は８つの項目でアンケートをとった。レーダーチャートを見て振り返ることで学級の成長を考えることができる。

本学級では，５月と７月に行った。５月の結果を見てみると，「助け合い，教え合う」「相手を受け入れる」などの数値が高かった。これは，互いを認め合い，安心して伝え合える風土の醸成が数値として表れたと考察する。さらに７月の結果を見てみると，８つ中，７つの数値がプラスになっていた。子どもと振り返りを行うとこれらも伝え合うことを大切にしてきたことが原因だと考察できる。実際に子どもたちからは「困っている人を助ける人が増えた」や



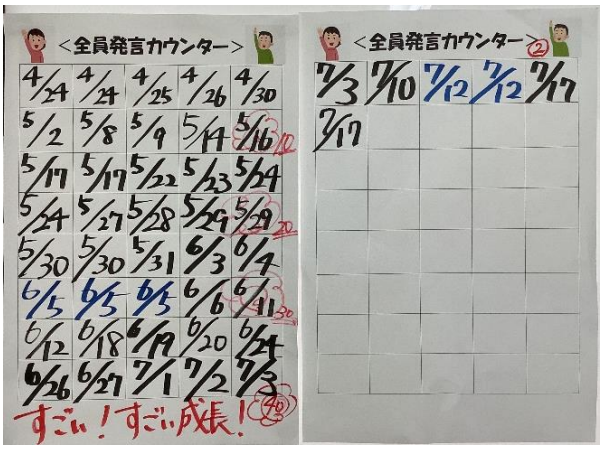
７月

「みんなで発言を頑張ってきたから話をつなげるが上がったんだよ」といった声が上がった。

3 実践の成果

伝え合うことを大切にしてきたことで様々な成果が見られた。具体的な姿として３つ例示する。

(1) 全員発言カウンターに取り組む姿



前述したように授業では認め合う風土を醸成しながら，発言を軸に伝え合いを行ってきた。すると１日の中で全員が１回以上発言できる日がでてきた。そこで，それを１つの成果として子どもが認識できるよう「全員発言カウンター」を作成した。これは，全員が１回発言すると溜まっていくカウンターである。これに取り組み始めるとより一層自分たちの考えや思いを伝えたいという子どもが増えた。本学級には，緘黙傾向が強い子どももいる。しかし，授業の中での教え合いやどんな意見も大切に認め合う風土の中で大きく成長し，本人も「昨年は発言が全然できなかったけど，今年はできるようになった」と自分の成長を強く実感している。その成長している姿を「学級目標を使った友達のいいとこ見つけ」で友達から伝えてもらう。そうすることで価値づけされ，自己肯定感の高まりにつながっていく。このように，みんなで教え合うこと，自分の考えを全体に伝えること，周りに認めてもらうことといった伝え合う活動が自己肯定感や自己存在感を感じることにつながり，学級に好循環をつくっていた。

(2) 誰とでもどんな時でも仲良くする姿

日常活動で取り組んでいる「アクション」を始めてから少しずつ子どもたちに変化が見られた。４月では，同じ人や同性とばかり活動していた子どもたちが性別関係なく活動する様子が見られた。驚いたのは，集合写真を撮るときだ。私が「自分たちで考えて並び方を決めてごらん」と伝えると，子どもたちが「男女で並ぼう」と声を掛け始めたのだ。嫌な顔をする子どももおらず，男女で並び終えた列を見たときに改めて常日頃から誰にでも声を掛け合ったり気持ちを伝え合ったりすることの大切を感じた。

(3) 自分たちで伝え合い，考え，それを行動につなげる姿

自分たちの気持ちや考えを安心して伝えられるようになってきた。すると，不測の事態にも学級として子どもたちが主体的に対応する姿が見られた。体調が悪い子どもがおり，突然の対応で私が教室を空ける時間ができてしまった。教室に残っていた子どもに指示を残す時間もなかった。心配な気持ちで教室に戻ると教室から歌声が聞こえてきた。子どもたちは，自分たちで何をすればよいか考えを伝え合い，校歌を歌うことに決めた。その日をきっかけに自分たちにできることはないか自分の考えを班の友達に伝えたり，学級全体に伝えたりして，行動する姿が見られた。自分の思いや考えを安心して伝えられる学級だからこそ，意見を出し合い，み

んなで行動に移すことができたと考える。

4 実践を振り返って

一人一人が安心して伝え合える学級を目指して様々な実践に取り組んできた。取り組んできて何よりうれしく感じることは，やはり子どもたちの成長である。子ども同士のトラブルから伝え合いによる成長を感じる場面があった。休み時間に子どもたちが数名輪になって集まっていた。遊んでいる様子ではなかったので見守っていると，突然全員手を繋ぎ始めた。子どもに話を聞くと，休み時間に喧嘩が起きてしまったが，当事者同士がお互いに気持ちを伝え合い，お互いに謝罪をした。そして，仲直りの気持ちを表して周りで見守っていた子どもと手をつないだ場面だったことが分かった。気持ちが衝突しても，きちんと言葉を選び，気持ちを伝え合う姿に大変心が温かくなった。まさに私が目指している学級像の１つであった。

今後も伝え合うことを通して，互いを認め合い自己肯定感や自己存在感を感じることを大切にし，「一人一人が安心して伝え合える学級」を目指していきたい。

[参考文献・引用文献]

・小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説「特別活動編」：文部科学省

・生徒指導提要（改訂版）：文部科学省

・赤坂　真二「学級を最高のチームにする極意」：明治図書出版社

・新潟市立学校園教育の推進（令和６年度版）：新潟市教育委員会